

第2回次世代育成協議会の振り返り（協議会委員意見）

1 放課後子どもひろば事業の区民への周知に関すること

・「放課後子どもひろば」について、きちんと調整し、保護者に伝えていく必要性

(1) 小学1年生の保護者の何人もから、実は選択肢がいくつもあったということ、やっと今頃になってわかってきた、というようなことを言われた。

- ・放課後子どもひろば、学童クラブ、児童館の違い、基本的な定義。

区としての考え方と実情、それぞれの役割で子どもにとってどう違うか、年間費用の違い、指導員は何をしてるのか。

(2) 家族のあり方や社会の雰囲気が多様化し、保護者も子どもに全然目がいかなくなっていく。親になり子どもがそこに行く状況になってから初めて知るのではなく、社会全体として、放課後子どもひろばが認識してもらえるような場になってほしい。

(3) 実態把握をできるだけ早い時期に数値的にも質的にも把握していくことが大事。

2 放課後子どもひろばの工夫の余地に関すること

・「自由度がある空間で、「ひろば」をこれからどう機能させていくのか」

・「限られた空間で、担い手にも工夫の余地があるか」

(1) 職員配置

ア 学力がついていないから、いじめの問題などが発生する。一人ひとりの落ちこぼれの状態を何とかできればと思う。そこで、教員の資格を持つ人やカウンセラーを入れた広範囲な見守りが必要だと考える。

イ 子どもが主体的に遊ぶことを指導するには専門性が求められる。

新宿独自にそれを担う人、その体制を改めて考えていくことが大事。

(2) 地域とのつながり

「ひろば」のスタッフから、地域に対して、広い空間があるのにもかかわらず、外遊びをする折角の環境を利用できていないので、平日に地域で子どもたちと遊んでくれる人はいないかとの相談を受けた。そこで、小学校に、週1回とか月1回で遊びに行っている。

(メリット)

・子どもたちと地域の人とのつながりが持てる。顔見知りになることで、土日には地域の人の活動しているところで、一緒に遊べる。人と人のつながりがあると、子どもも地域に入りやすいし、子育てをひと段落した世代ともつながり、地域が居場所としても利用、活用できる場所となる。

(3) 学童クラブから放課後子どもひろばへの移行の工夫

先生のケアが良く、小学3年生までで、学童クラブから「ひろば」に、希望があれば自由に行ける仕組みがあり、4年生になってスムーズに「ひろば」に移行できる。

(4) 子どもが外で遊ばないことについて

- ・小学校では、「ひろば」の登録者は多いが実際に遊ばせる保護者が少ないので、危機感を覚えている。遊ぶ子が少ないのは、生きる力の3要素、確かな学力、豊かな心、健康体力の向上の全て関わってくる問題なので、保護者への啓発をさらに強化しなければならないと思っている。

3 中学生、高校生の居場所に関すること

(1) 地域センター

- ・それぞれの決められた場所でなくても、難しくない場所を確保できるのではないかな。
- ・地域センターは十分な居場所になっているが、いてもいい場所、あえて何か用意してあげるのではなく、いても許される場所と理解すべき。地域センターでも場所によっては、いられない場所もある。子どもたちの精神年齢が下がり、いろいろなトラブルが生じている。子どもたちの低年齢化が浮き彫りになってくると、いてもいい場所から、いてはいけない場所が変わっていく危惧がある。
- ・施設貸出でお金を払って活動している団体との住み分けが難しくなっている。
- ・指導するのではなく、余計なことをしたらしっかり叱れるような大人が地域が増えてほしい。

4 子どもの居場所そのものに関する意見

- (1) 子どもはいろいろな課題を抱えており、また保護者にも課題がある。どの施策がいいのか悪いのかというよりも、子どもの状況を見ながら、どんな子にもどこかで居場所を作れるような施策がいい。

- (2) 花火やボール遊びなど、子どもたちに思いきり遊ばせてあげられる場所があるとありがたい。

5 その他意見

- (1) ・年齢が高くなっても、「何かしなさい」と言われると、初めはやるが続かない。(例；各駅停車の電車利用で2時間かけて地域主催のハイキングを行った事例)

- ・子どもたち自身が、自分たちでどうしたらいいのかのルールをつくり、自分たちで決めたことだとかなり違うと思う。全てのことを指示されてやるのではなく子ども自身が考えれば、真剣にいい方法を見出していくと思う。

- (2) 自己決定していく人材を育てるために、小さい時から意見を聞いていく動きがあればよい。

- (3) 人を思いやれて、人と協調していくことができるようになるのが大事。小さいころに個人尊重ではなく協調性、みんなで仲間意識があって、一緒にやっていくということを育てていく。居場所事業以前に、みんなでの達成感(文化祭、運動会、合唱コンなどで子ども同士が下手な子を支援している)を経験させて、子どもに協調性のようなものを育てられるような教育ができるといい。

- (4) 子どもたちはものすごく忙しくて、地域で何かイベントをしても集まらない。

- (5) 個人尊重主義で、ご家庭の親の意見が大事ということになってしまっている。

- (例；昔は「子どもは風の子」＝半袖半ズボン →長ズボン＝風邪をひく子が多くなった)

- (6) 大学が大変で、子育てひと段落の次期が遅くなっており、地域活動もいつも同じメンバーになる。保護者に伝えようとしても、保護者は手一杯な状況である。

- (7) 子どもにとって育つとはどういうことかという教育の原点を忘れてはならない。また、子どもたちが思い切って自由に外で遊ぶことは大切。新宿区は、都市部であっても緑が多いので、子どもにとって活かされる環境になるよう、教育や保育の原点を、保護者にも理解できる方向性で考えていく。